「透明な檻の中で８」

～地層の声を聴く人たち～



KHJ岡山きびの会　ふじさん

『透明な檻の中で 8』～地層の声を聴く人たち～

まえがき

世間の物差しや「こうあるべきだ」という無言の規範――私たちはそれを、気づかぬうちに“透明な檻”として身にまといながら生きている。
2026 年。AI やデジタル技術が社会の仕組みを驚くほどの速さで塗り替えていく一方で、人間の心と身体は、その速度に追いつけず、静かな置き去りを感じ続けている。
岡山の古い雑居ビルの 4 階。蛍光灯がかすかに唸る「KHJ 岡山きびの会」の事務所には、今日も行き場のない痛みを抱えた家族や当事者の声が届く。
その机に向かう藤堂仁――ジーンさんは、制度の書類を整えながら、社会の揺らぎを静かに見つめている。
日本人が古来より大切にしてきた「和」や「調和」の知恵は、本来は共同体を守るための優しい知恵だった。
しかし時としてそれは、個人の生き方を縛りつける強烈な同調圧力へと姿を変え、言葉の端々に冷たい檻をつくり出す。
さらに、その檻を支えるはずの支援組織でさえ、「正しさ」の追求や構造的な対立によって引き裂かれ、本来守るべき人たちを苦しめてしまうことがある。
ジーンさんは、その揺らぎの中で、ただ静かに、壊れないように裏方の仕事を続けている。
だが、どれほど檻が硬く、社会が揺らいでも、人間の身体には、呼吸を整え、自分の中心を取り戻すための「禊（みそぎ）」の方法が備わっている。
そして、完璧でなくても、互いの弱さを隠さず差し出し合うとき、身体の奥で固まっていたものがゆっくりほどけ、凍りついた共同体の空気に小さな亀裂が入り、そこへ温かな光が差し込んでくる。
本書は、その「透明な檻」の中で息をひそめる人たちが、もう一度、自分自身の言葉と身体を取り戻していくための、静かで小さな物語である。

第一章：地層の声

岡山市内の古い雑居ビルの 4 階。
その一角にある「KHJ 岡山きびの会」の事務室には、時間の流れがどこかゆっくりと沈殿しているような、独特の匂いが漂っていた。
部屋の片隅に置かれたグレーのスチール製の事務机は、長い年月を経て色あせ、天板には細かな傷が無数に刻まれている。引き出しを開ければ、昭和から平成、そして令和へと受け継がれてきた朱肉のケース、すり減った木軸の鉛筆、色褪せた領収書の束が静かに眠っている。
藤堂仁――ジーンは、その冷たいスチールの手触りに指先をそっと触れた。

そこにかつて触れていた誰かの手の温度、焦り、諦め、祈りのようなものが、微かな残響として立ち上がる気がした。
世間の物差しから見れば、ここは「社会の表舞台から外れた人たち」がたどり着く場所なのかもしれない。
だがジーンにとって、この事務室は、日本という土地が長い時間をかけて折り重ねてきた「文化の地層」の断面そのものだった。
窓の外では、2026 年の乾いた風が岡山の街のアスファルトを撫で、AI によって最適化された都市の音がかすかに響いている。
しかし、この古びた雑居ビルの部屋の中だけは、奇妙なほどの静けさが保たれていた。
まるで外の時間とは別の層に存在しているかのように。
ジーンは、支援対象の家族から届いた申請書類の文字を見つめた。
そこに並ぶ「すみません」「ご迷惑をおかけします」という決まりきった言葉。
それは丁寧な謝罪であると同時に、自分の存在を小さく畳み込み、誰にも摩擦を与えないように生きようとする、一種の呪文のようにも見えた。
「言葉が、人を縛る檻になっている……」
ジーンは静かに息を吐き、背筋をスッと伸ばした。
武道の稽古で培った呼吸が、胸の奥のざわめきを静かに沈めていく。
激しい運動ではなく、ただ重心を落とし、自分の身体の中心を整えるだけで、外側の喧騒からふっと切り離されたような領域が生まれる。
この国の人々は、太古の昔から自然の猛威にさらされ、個人の力ではどうにもならない現実の中で「共存共栄」の知恵を磨いてきた。
争いを避け、場の調和を尊び、物に魂が宿るように丁寧に扱い、言葉の裏に祈りを込めてきた。
だが、その「和」や「調和」を重んじる文化の裏側で、現代のエゴや欲望の暴走が、古い檻をギシギシと軋ませている。
AI が社会の仕組みを急速に書き換え、誰もが効率と成果を求められるようになった世界で、自分の居場所を見失った人たちが、この「KHJ 岡山きびの会」の扉を叩く。
「ジーンさん、届いたよ」
ドアが静かに開き、ソウが顔をのぞかせた。
かつて自分の車の中で声を殺して泣いていた青年は、今では少しずつ自分の痛みを言葉や絵として外に出せるようになっている。
その表情には、かつての硬さが取れ、どこか柔らかな光が宿っていた。
「ああ、ソウくん。ちょうど、古い資料を整理していたところだ」
ジーンはペンを置き、ソウに向き直った。
古い雑居ビルの 4 階という小さな空間から、また新しい対話が始まろうとしている。
透明な檻の中で身動きが取れなくなっている人たちの沈黙をほどくための、静かな旅が。

第二章：弱さの告白

岡山市内の古い雑居ビルの 4 階にある「KHJ 岡山きびの会」の事務所は、決して広くはない。

県から運営委託を受けた「ひきこもり居場所」としての機能も持つため、限られた空間の中に、生活と支援の現実がぎゅっと詰まっていた。

部屋の中央には、いくつかの会議テーブルを合わせた雑談スペースがあり、その一角でソウがスケッチブックを開いていた。

描かれているのは、精巧な風景でも鮮やかな花でもない。

何かを押し殺すようにうずくまる人の輪郭と、その周囲を幾重にも取り囲む細い線の束――それが「透明な檻」の形なのだと、言葉にしなくてもジーンには伝わってきた。

天井の古い蛍光灯が、わずかに低く唸るような音を立てて白い光を落としている。

資金不足で LED 化など到底できず、壁際には古びたエアコンと一台の扇風機、そして冬の名残を伝える電気ストーブが窮屈そうに並んでいた。

季節の変わり目にはこの頼りない冷暖房に苦労させられるが、不思議とこの空間には、訪れる人たちの張り詰めた緊張をそっと受け止めるような温もりが漂っていた。

「ねえ、ジーンさん」

ソウは鉛筆を止めず、ぼそりと言った。

かつて、どうしようもない息苦しさに耐えかねて、自分の車の運転席で頭を抱え、声を殺して泣いていた青年。

あの頃の彼にとって、「弱い自分を見せること」は社会から完全に脱落することを意味していた。

「この前さ、昔の自分を思い出してノートに書いたんだ。そしたら、涙が止まらなくなってさ。こんなことで躓いてる自分が情けなくて、恥ずかしくて……最初はそれを隠そうとしたんだ」

ソウの手が止まり、スケッチブックの紙面をじっと見つめた。

「だけどさ、隠そうとすればするほど、その檻が硬くなっていくみたいでさ。息ができなくなった。だから、思い切って月例会のアンケートの隅に、そのときのことをそのまま書いたんだよ。『怖かった』って。『車の中で泣いていた』って」

ジーンは手元のスチール机から顔を上げ、静かにうなずいた。

「隠さずに書いたんだね」

「うん。そしたらさ……」

ソウはかすかに笑った。

「意外なことに、誰も笑わなかった。それどころか、資料を読んだ母親の一人が、壁際の赤い小さなソファで、ぽつりと言ったんだ。『私も、ずっと同じだった』って」

その母親は、この日の月例会に参加している当事者の親だった。

世間の物差し、立派な家庭像、近所の目、そして「ちゃんとした親であらねばならない」という見えない規範に縛られ、誰にも弱音を吐けずにここまでやってきた人だった。
「私ね、完璧な母親じゃなきゃいけないって思っていたんです」
赤いソファに腰掛けた彼女は、震える声でそう切り出した。
ホワイトボードに向けられた視線を気にするように一度うつむいたが、ソウが自分の過去の涙を飾らずに語った冊子を手にしていた。
「息子が部屋から出なくなったとき、自分が何かを間違えたんだって、毎日自分を責めました。近所の人に会うのが怖くて、カーテンを開けられなかった。でも……こうやって『弱い自分』を出してもいいんだって思ったら、胸につかえていたものが、少しだけ溶けた気がして……」
彼女の目からこぼれ落ちた涙は、気恥ずかしさを隠すためのものではなく、長年凍りついていた心がようやく融解するときに発する、温かな水滴のようだった。
ジーンは手元のスチール机に目を落とした。
日本という土地は、古来より「調和」や「和」を尊び、互いに迷惑をかけないことで社会を保ってきた。
それは美しい知恵である反面、「弱さや醜さを隠すこと」を無意識のうちに美徳として強要するシステム――透明な檻――にもなっていた。
だが、ソウが自分の弱さを隠さず差し出し、それに呼応するように母親が涙を流したこの瞬間、その硬質な檻に最初の小さな亀裂が入った。
完璧であることではなく、弱さを分かち合うこと。
それこそが、凍りついた共同体の空気を優しく調律するための、最初の「襖」なのだとジーンは感じていた。

第三章：言葉の檻

古い蛍光灯のわずかな唸り声のほかには、事務室を叩く外の風の音しか聞こえない。
ジーンは、支援者から届いたメールや、月例会で交わされたアンケート用紙の束を見つめていた。
ページをめくるたび、そこには切実な文字が並んでいるが、近年の月例会に参加する親たちの高齢化は隠しようもなかった。
震える手で万年筆やボールペンを握りしめ、絞り出すように書かれた文字は、時に達筆すぎて、あるいは掠れていて、一見しただけでは解読不能に近いものも少なくない。
「……これ、なんて書いてあるんだろ」
ジーンは目を細め、文字の癖や前後の文脈、そしてその行間に込められた親たちの痛みを、まるで古文書でも解読するかのように、一つひとつ丁寧にイメージしながら読み解いていく。
『……息子の将来が、やはり……不安で、でも、ここで話せて……少し、救われました…

…』
綺麗に整えられたデジタルなフォントとは真逆にある、その歪で、しかし圧倒的な「生（き）の重み」が宿った文字。
親たちは、衰えていく身体と老いていく自分を抱えながら、それでも我が子のために絞り出すような思いで、そのアンケート用紙を埋めていたのだ。
そこに並ぶ文字は、どれも礼儀正しい。
「すみません」
「ご迷惑をおかけしております」
「なんとか頑張ります」
それらは一見すると、日本的な謙虚さや他者への配慮に満ちた美しい言葉に思える。
だが、この「KHJ 岡山きびの会」の扉を叩く家族や当事者たちの口から発せられるとき、そして高齢の親たちの震えるペン先から紡がれるとき、それらの言葉はまったく違う顔を見せる。
それは感謝の表現ではなく、自らの存在の輪郭を削り取り、誰にも摩擦を与えないようにするための「言葉の檻」なのだ。
「日本人の言葉って、不思議ですよね」
雑談スペースの会議テーブルに突っ伏しそうになりながら、ソウがぽつりと言った。
スケッチブックには、無数の小さな文字がまるで網の目のように描き込まれている。
「学校でも、会社でも、社会に出ても……
『自分を出さないこと』が美徳みたいに教えられる。
空気を読んで、波風を立てず、迷惑をかけないように生きる。
それができないと、『お前がおかしい』って言われる気がして……」
ソウの言葉は、この国の人々が無意識にまとっている空気の正体を突いていた。
日本語という言語は、主語をあえて曖昧にし、場の調和を保つように設計されている。
それは本来、自然災害が多く、小さな共同体で助け合わなければ生きていけなかったこの土地の知恵であり、共存共栄のための優しさだったはずだ。
しかし、その優しさがいつの間にか形を変え、「個人の生きる選択肢」を縛り付ける強固な規範になってしまった。
「ちゃんとしなければならない」
「人に迷惑をかけてはならない」
その見えないプレッシャーが、言葉の端々に忍び込み、引きこもる本人たちだけでなく、老いていく親たちの心までも窒息させていく。
「子どもが部屋から出ないのは、私の育て方が悪かったからでしょうか……」
赤いソファに座っていた母親が、以前の相談のときに漏らした言葉が、ジーンの脳裏によみがえる。
彼女もまた、「すみません」という言葉の檻に閉じ込められ、誰にも助けを求められずに

何年も一人で耐え続けていたのだ。
ジーンは手元のスチール机の引き出しから、古い朱肉と印鑑を取り出し、読解したアンケートの束を次の会報へとまとめる作業に戻った。
カチリ、と硬い音が事務所の空気を揺らす。
言葉は、人と人をつなぐこともできれば、人を孤立させる檻にもなる。
そして高齢の親たちが震える手で残したその文字は、消えかけていながらも、確かに誰かに届こうとする必死の祈りそのものだった。
――では、この硬直した言葉の檻をほどくには、どうすればいいのだろうか。
ジーンがふと顔を上げると、壁際のホワイトボードの脇に、先ほどソウが描いたスケッチの切れ端が貼られていた。
そこには、ただ一言、不器用な文字でこう書かれていた。
『ただいま、と言いたい』
その文字を見たとき、ジーンの胸の奥が微かに熱くなった。
それは謝罪でも、遠慮でもない。
ただ「そこに戻ってきていいのだ」という安心感を求める、あまりにも純粋な人間の声だった。

第四章：禊の身体

作業の手を止め、ジーンはスチール机から静かに立ち上がった。
窓の外では、2026 年の乾いた風が雑居ビルの外壁を擦り、どこか遠くで車の走行音がせわしなく通り過ぎていく。
頭の中では、高齢の親たちが震える手で書き残したアンケートの文字や、社会の圧倒的な効率化の波、そして行き場のない痛みが渦巻いていた。
思考がぐるぐると回り始め、胸のあたりが重たく澱んでいくのがわかる。
（いけないな……）
ジーンは小さく息を吐き出すと、事務所の隅に立った。
誰に見せるわけでもなく、自然に両足を肩幅に開き、重心をそっと落とす。
古びた蛍光灯の下、冷たい床板を足裏でしっかりと捉える。
背筋をスッと伸ばし、肩の力を抜く。
それは武道の稽古の構えであり、この混沌とした日常の中で自分の中心を取り戻すための、静かな儀式だった。
すうっ、と鼻から息を吸い込む。
胸を膨らませるのではなく、下腹部に空気を溜め込むように深く、細く。
息を吸うごとに、外側の世界から持ち込まれた雑音や、言葉の檻に閉じ込められた人たちの痛みが、自分の身体を通過して足の裏から地面へと抜けていくような感覚がする。
吐く息とともに、胸のつかえがゆっくりと溶けていく。

武術の原点は、生き残るための反射だった。
しかし、時代を経てそれが「道」になり、さらに日常の「禊（みそぎ）」へと昇華されてきた。

水で身体の汚れを洗い流すように、呼吸と姿勢で心の澱みを清める。
それは特別な場所で行うものではなく、この古びた雑居ビルの片隅でも、いつでも行うことができる。
「……ふう」
数度の深い呼吸を繰り返すうちに、凝り固まっていた視界がクリアになっていく。
言葉がどれほど人を縛り、社会の空気がどれほど重苦しくとも、人間の身体にはこうして自分をゼロに戻すための「静けさ」が備わっている。
雑談スペースのほうに目をやると、ソウが鉛筆を置き、じっとこちらを見つめていた。
その表情には、先ほどまでの曇りが取れ、どこか穏やかな空気が漂っている。
「ジーンさん、なんだか……空気が変わったね」
ソウが驚いたような、それでいてホッとしたような声で言った。
ジーンは静かに微笑み、肩の力を完全に抜いてからうなずいた。
「ああ。少し、呼吸を整えていただけさ」
言葉が人を縛る檻になるのなら、身体の静けさは、その檻の中に一筋の風を通す「禊」になる。
ジーンは再びスチール机へと戻り、次に届いたメールを開いた。
そこには、画面の向こう側から届いた、また別の一通の切実な声が記されていた。

第五章：レンの声

ジーンがスチール机のノートパソコンに向かい、画面に届いた新しいメールを開いたときのことだった。
受信トレイの一番上に表示されていたのは、一通の短いメッセージ。
差出人は「レン」。
KHJ 岡山きびの会の活動圏内からは遠く離れた、東京の片隅――あるいは、社会の網の目の隙間に身を置きながら、時折こうして画面の向こうからポツリと言葉を投げかけてくる青年。
画面に映し出された文字は、整えられたビジネスメールとは程遠く、ただ思い詰めたような、しかし驚くほど純度の高い言葉の断片だった。
『親が老いていく。自分が動けないまま、時間だけが過ぎていく。
このままじゃ、誰も助からない。
だけど、どうしていいか分からない。
ただ、この部屋の天井だけが、やけに白いんだ』

それだけの短い文面だった。
だが、その背後には、誰にも見えない暗闇の中で息を潜め、自分の存在価値すら見失いかけている一人の人間の、剥き出しの痛みが張り付いていた。
岡山の古びた雑居ビルの 4 階、古い蛍光灯の下でその文字を読んだとき、ジーンの胸の奥がキュッと締め付けられた。
ソウが自分の過去の涙を言葉にし、月例会の母親が涙とともに「完璧でなくていい」と気づき始めた一方で、日本のどこかでは、まだ誰にも見つけてもらえない「透明な檻」の中で、レンのような若者たちが完全に孤立している。
言葉が檻になり、社会の効率化や AI の冷たい最適化が人間の痛みを置き去りにしていく現代において、レンのその一言は、あまりにも無防備で、だからこそ痛切だった。
「……レンくんは今、どこでこの空を見ているんだろうな」
ジーンは独り言のように呟き、キーボードにそっと指を置いた。
何か気の利いたアドバイスを送るべきだろうか。
行政の支援制度か、居場所の紹介か。
頭の中にいくつかの選択肢が浮かんだが、すぐに消えていった。
いま、レンが求めているのは、解決策や正論ではない。
ただ、「自分のその痛みが、誰かに届いた」という確信なのだ。
ジーンは深く息を吸い込み、武道の稽古で培った中心の軸を意識しながら、ゆっくりと文字を打ち始めた。
『天井の白さは、時に果てしなく感じられるよね。
何もできなくていい。ただ、そこで息をしていることだけでも、今は伝わっているよ』
送信ボタンを押した瞬間、事務所の窓の外を走る車の音が、なぜか少しだけ遠くに聞こえた。
画面の向こう側から届いたレンの一言が、岡山の古い事務室の空気を静かに揺らし、そしてジーンたちの現在地を鮮やかに照らし出していた。

第六章：正しさの衝突

岡山の古い雑居ビルにある「KHJ 岡山きびの会」の事務所。
そのスチール机の上には、日々の相談票だけでなく、全国組織の激動を伝えるメールや資料の束が積み上げられていた。
窓の外では AI 化された現代社会が効率よく回転しているが、この部屋の空気は、最近どこか重く張り詰めていた。
全国の本部と支部を揺るがす「分裂」が、ついに現実のものとなっていたからだ。
東京の本部は、組織の原点である「寄り添う支援」「当事者と家族に寄り添う居場所づくり」へと大きく舵を切り直した。
一方で、法制化や制度改革を強く主導してきたメンバーたちは、全国の支部で賛同する者

たちとともに組織を離れ、別の道を歩み始めている。
「どちらも大切なんですよ。法整備がなければ支援は自治体の裁量任せになって地域格差が消えないという主張も、法律ができても目の前で孤立している家族には届かないという現実も、どっちも正しいんだから……」
ジーンは、その板挟みに揺れる事務室の空気を静かに眺めていた。
家族会運動の担い手の多くは、かつて我が子の問題で地獄のような苦しみを味わってきた手弁当のボランティアだった。
その「個人の痛みを背負った当事者性」こそが最大の原動力である一方、あまりの強い使命感ゆえに、「自分たちが一番苦しんできたのだから、自分たちのやり方が正しい」という確信が生まれやすかった。
株式会社のような明確な業績指標がない NPO の空間では、政策の是非というよりも、個人の正当性や人間関係の勝敗がそのまま組織のガバナンス闘争にすり替わってしまう。
さらに、ひきこもり当事者本人が声を上げにくいため、自分たちの路線が本当に当事者の生活を変えているのかというフィードバックが届きにくい。
結果として、路線の正否は水掛け論になり、「誰が組織の意思決定権を握るか」という政治力学に置き換わっていった。
誰もが「法制化も、目の前の伴走も、どちらも絶対に必要だ」と頭では分かっている。
それなのに、時間軸の違いや、限られたリソースの配分、そしてそれぞれの背負ってきた痛みの重さゆえに、組織は二つに引き裂かれていく。
「どっちも、自分の正しさを証明するのに必死なんだよね……」
雑談スペースの隅で、ソウが苦笑いをしながら呟いた。
そのスケッチブックには、互いに正義を主張しながら引き裂かれていく二つの矢印と、その真ん中で押し潰されそうになっている小さな人の姿が描かれていた。
ジーンは深くうなずいた。
これは単なる「人間関係のトラブル」ではない。
日本の社会構造そのものが抱える「病」の縮図だった。
個人や家族が抱える苦悩を「社会全体の課題」として見えず、「家」単位での自己責任として処理してきた歴史。
そして、「就労＝社会参加」という単一の物差しでしか人間を測れない無意識の刷り込み。
多様性を口にしながらも、実際には「普通」という同調圧力から外れた者を許さない空気。
その締め付けから逃れようと作られたはずの家族会という組織すらも、いまや「正しさの檻」に囚われ、本来のメッセージ――「働けなくても、家から出られなくても、生きていていい」という存在の肯定を伝えるエネルギーを、内部闘争へとすり潰されていた。
「正しさを追求すればするほど、お互いを守るはずの組織が別の檻になってしまう……。

皮肉なものだな」
ジーンが呟くと、スチール机の上の古い電話が鳴り響いた。
組織の名前がどう変わろうとも、誰がどこへ去ろうとも、目の前で揺れる親子の手を握ることだけは変わらない。
対立の向こう側で、今この瞬間も息を潜めている人たちがいる。
ジーンは深呼吸をひとつし、冷たい受話器をそっと持ち上げた。

終章：霧の向こうの光

組織の分裂という大きな波が去った後も、岡山にある古い雑居ビルの 4 階には、変わらない日常が戻っていた。
古びた蛍光灯がかすかに唸り声を上げ、壁際のエアコンが時折頼りない風を送る。
スチール机の上には、今日も新しい相談票や、全国から届いた会報の束が並んでいる。
ジーンは、届いたばかりの一通のメールを画面で開いていた。
それは東京の片隅から再び届いた、レンからのものだった。
『あのあと、少しだけ窓を開けて外の空気を吸ってみた。相変わらず何も変わっていないけれど、天井の白さだけが、少し遠くなった気がする。……また、書いてもいいですか』
短い、たった数行のメッセージ。
しかし、その文字には、硬直していた「言葉の檻」にわずかな風穴が開き、レンが自分の足で外の世界へ向けて小さく一歩を踏み出し始めた気配が宿っていた。
ジーンは静かに息を吸い込み、キーボードに手を添えた。
『いつでも待っているよ。君のペースで、ゆっくり呼吸をすればいい』
送信ボタンを押すと、画面の向こうの誰かと、岡山のこの小さな部屋が、目に見えない確かな糸で結ばれているような温かな実感が胸に広がった。
雑談スペースのほうでは、ソウが新しいスケッチブックを開いていた。
そこに描かれていたのは、引き裂かれる矢印でも、うずくまる人の姿でもない。
古い雑居ビルの窓から差し込む柔らかな光の中で、不器用ながらもゆっくりと背筋を伸ばし、外の世界を見つめる青年の姿だった。
「ジーンさん、次回の月例会の準備、始めようか」
ソウが顔を上げ、穏やかな笑みを浮かべて言った。
その声には、かつての怯えや、正しさを証明しようとする気負いは微塵もなかった。
ただ、目の前の一人と向き合うための、静かな覚悟と優しさがあった。
日本という土地が長い時間をかけて折り重ねてきた「文化の地層」。
その表面には、調和という名の同調圧力があり、効率化の波があり、正しさを競い合うあまりに自分たちを縛り付けてしまう「透明な檻」が今もなお存在している。
だが、どれほど檻が硬くとも、人が互いの弱さを認め合い、ただそこに生きていることの温もりを分かち合うとき、その檻には必ず小さな亀裂が入る。

完璧でなくていい。
強くなくていい。
言葉が檻になるのなら、呼吸を整え、ただ「ただいま」と言える場所へ戻ればいい。
ジーンはスチール机から立ち上がり、窓の外へと視線を向けた。
岡山の街の空には、秋の澄んだ青空がどこまでも広がっていた。
霧の向こうで、新しい光がゆっくりと世界を照らし出し始めている。
（物語は、静かな希望を胸に、次なる地層へと続いていく――）

登場人物紹介

藤堂 仁（とうどう じん / ジーン）

「KHJ 岡山きびの会」の運営に携わる男性。

武道で培った身体感覚と静かな眼差しを持ち、日本文化の地層や言葉の裏に潜む人々の痛みを読み解く。

社会の効率化や同調圧力に縛られた人たちが、自分を取り戻すための「襖」の時間をそっと支える存在。

ソウ

かつて自分の車の運転席で声を殺して泣いていた青年。

現在は「KHJ 岡山きびの会」の居場所に出入りしながら、自身の痛みや透明な檻の形をスケッチや言葉として表現し始めている。

ジーンの良き相棒として、同じ苦しみを抱える人たちに静かな光を投げかける。

レン

東京の片隅、あるいは社会の網の目の隙間に身を置きながら、画面の向こうからポツリと言葉を投げかけてくる青年。

孤立と不安の中で純度の高い痛みを抱えているが、ジーンとの小さなやり取りをきっかけに、少しずつ外の世界へ向けて呼吸を始めようとする。

当事者の親たち

KHJ 岡山きびの会の月例会に集う高齢の親たち。

「完璧な親でなければならない」という世間の物差しや「言葉の檻」に苦しみながらも、震える手でアンケートに己の思いを綴り、互いの涙を分かち合うことで少しずつ心を融解させていく。

あとがき

『透明な檻の中で』シリーズ第 8 作となる本書を、ここまでお読みいただきありがとうございます。

今回は、岡山市内の古い雑居ビルという具体的な空間を舞台に、私たちが日常の中で無意識に纏っている「言葉の檻」や、支援現場が抱える生々しい構造的葛藤――法制化と伴走支援のジレンマ、組織の分裂、支援者の当事者性の重さ――を描き出しました。

同じ痛みや願いを抱えているはずなのに、正しさを競い合うことでお互いを縛り合ってしまう。

あるいは、高齢化する親たちが震える手で我が子の将来を案じ、絞り出すようにアンケート用紙を埋めていく――。

その現実の切なさと、それらを乗り越える「人間の身体の静けさ」、そして「他者の痛みに触れることの温もり」を、どうしてもこの物語の中に残しておきたかったのです。

ジーンがスチール机に向かい、ソウがスケッチブックを開き、画面の向こうのレンや全国の親たちがそれぞれの場所で息をしているように、この世界のどこかには必ず、「ただいま」と言える場所や、呼吸を整えられる静けさがあると信じています。

この物語が、今この瞬間もどこかの檻の中で息を潜めている誰かの心に、そして日々の支援や営みに向き合うすべての人たちの胸に、小さな風を通すものであったなら、これ以上の喜びはありません。

令和 8 年 寒露

KHJ 岡山きびの会　　ふじさん